

令和
6年度版
小学校
道徳

きみがいちばんひかるとき



道徳科の授業で
大切に
したいこと

赤堀博行

① 考え、議論する道德科の授業の創造

道德の時間が、特別の教科化により「特別の教科道德（以下『道德科』）」としてスタートしてから六年が経過しました。

各学校では、道德科の授業の充実を図るために、創意工夫に努めています。教科化に際しては、「答えが一つではない道德的な課題を一人一人の児童が自分自身の問題と捉え、向き合う『考える道德』、『議論する道德』へと転換を図ること」が求められました。

この背景には、読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導が行われる例があることや、発達の段階などを十分に踏まえずに、望ましいと思われるわかり切ったことを言わせたり書かせたりする授業になっている例があることなど、多くの課題が指摘されました。

「考える道德」、「議論する道德」とは、どのような授業なのでしょう。そこで、道德科の特質を押さえたうえで、改めて「考える道德」、「議論する道德」を考えてみましょう。

道德科の特質とは

道德科の特質は、「小学校学習指導要領解説 特別の教科道德編（以下『道德科解説』）」に次のように示されています。

道德科は、児童一人一人が、ねらいに含まれる一定の道德的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、内面的資質としての道德性を主体的に養っていく時間である。

※道德科解説 78 ページ

「議論する道德」とは

「議論する」とは、どのようなことでしょうか。「議論」とは、それぞれが自分の考えを述べて論じ合うことです。「論じる」とは、筋道を立ててよくわかるように述べることです。

「議論」とは、ある問題について互いの考えを述べ合うことであり、それによって多様な感じ方や考え方に出会い、自分の感じ方、考え方を深めることといえるでしょう。小学校の発達の段階からいえば、「話し合う」ということです。

道德的価値に関わる自分の感じ方、考え方はどのようなものかを考え、それを明らかにしたうえで話し合いをします。自分の感じ方、考え方を友達に伝える、そして、友達の感じ方、考え方を聞く、そのうえで、友達のよさや自分のよさを考える、互いの相違を比べることを通して、自分の感じ方、考え方を再確認したり、よさを見つたり、課題や目標を見いだしたりする深い学びにつながっていきます。

『きみがいちばんひかるとき』に掲載されている全ての教材には、児童が考えたり、議論したりするためのヒントが例示されています。大いに活用してほしいところです。



『きみがいちばんひかるとき』には、全ての教材に、考えるためのヒントや話し合いに生かす視点を例示しています。

これは、学習指導要領に示されている道德科の目標のとおりですが、このような特質がない授業は、道德科の授業とはいえないでしょう。

「考える道德」とは

▼何を考えるのか

「考える道德」とは、何を考えるのでしょうか。それは、道德科の特質にあるように、授業で考える対象は、道德的価値です。道德的価値は、道德科の内容に含まれているよりよく生きるために必要とされるものであり、人間としての在り方や生き方の礎となるものです。具体的には、「誠実」とは何か、「親切」とはどのようなものかと道德的価値自体を観念的に考えるではありません。道德的価値について、自分はどのような感じ方、考え方をしていたのかを、道德的価値に関わる事象を基に考えるのです。

▼どのように考えるのか

道德科では、道德的価値について、自分はどのような感じ方、考え方をしていたのか、自分自身をはっきりと知る学習を、つまり、自分の価値観を自覚する学習をします。したがって、一人一人の児童が道德的価値、あるいは道德的価値に関わる事象を自分事として考えることが大切になります。

また、自分自身の価値観をはっきりと知るためには、道德的価値に対する一面的な思考では十分とはいえません。道德的価値をさまざまな側面から多面的に考察したり、他の道德的価値とのつながりや、他の道德的価値への広がりをも多角的に思考したりすることも大切になります。



23 泣いた赤おに

どこの山か、分かりません。家が一けん建っていました。
そこには、やさしいすなおな赤おにが、たった一人で住んでいました。
「わたしは、おにに生まれてきたが、できることなら、人間たちとも付き合って、仲よくくらしていきたいな」
赤おには、いつもそう思っていました。
そこで、ある日、赤おには、自分の家の戸口の前に、木の立て札を立てました。



君にどうして、友だちって、どんなかな。



おんせい

116

4年「23 泣いた赤おに」



酒田 広介 作 ● 吉田 尚令 絵

つなげよう

君は、これから友だちに、どんな話をしたいかな。



- 友だちを大切にすることは、どういうことでしょうか。
- 人間の友だちができたとき、赤おには、どんな気持ちになったでしょう。
 - 赤おには、しくしくと泣きながら、どんなことを思っていたでしょう。
 - 友だちを大切にすることは、どういうことでしょうか。



② 道徳科の特質を生かした授業構想

道徳科は、道徳性を養うために、その様相としての道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育成することを目標としています。そのために、次のような学習を行うことが道徳科の特質として大切になります。

1 道徳的諸価値について理解する

道徳的価値は、よりよく生きるために必要とされるもので、人間としての在り方や生き方の礎となるものです。

学校教育においては、発達の段階を考慮して、児童一人一人が道徳的価値観を形成するうえで必要なものを内容項目に含めて取り上げています。道徳的価値を理解することは、児童がさまざまな問題場面に出会った際に、その状況に応じて自己の生き方を考え、主体的な判断に基づいて道徳的実践を行うことにつながります。

答えが一つではない問題について、その状況に応じたよりよい行為を選択できるようにするためには、道徳的価値を単に一面的な決まりきった形で理解するのではなく、多面的・多角的に理解することが求められます。

具体的には、「よく考えて度を過ぎないように生活することは大切なことである」「相手の気持ちを考えて親切にすることは人間関係を良好に保つうえで必要なことである」などとする道徳的価値を、人間としてよりよく生きるうえで意義深いこと、大切なことであると理解すること（価値理解）。また、道徳的価値は人間としてよりよく生きるうえで大切なことではあるが、それを実現することは容易なことではないといった理解をすること（人間理解）。さらに、道徳的価値を実現したり、実現で

きなかったりする場合の感じ方や考え方は、人によって異なる、状況によって一つではないと理解すること（他者理解）です。

道徳科の授業で、どのような理解を図るのかは、授業者の指導観によりますが、自立した人間として他者と共にによりよく生きるための基盤となる道徳性を養うには、道徳的価値について実感を伴って理解できる学習を展開することが大切です。

なお、道徳的価値の意義やよさを観念的に理解させる学習に終始することは、一面的な理解に留まるだけでなく、特定の価値観の押し付けにもつながりかねないので留意したいところです。

2 自己を見つめる

道徳科の授業構想で最も大切なことは、児童が道徳的価値を自分との関わりで考えるようにすることです。道徳的価値を観念的に理解することではなく、自分事として実感を伴って感じたり考えたりすることが重要です。

自己を見つめるとは、今までの自分の経験やそれに伴う感じ方、考え方を想起し、確認することを通して道徳的価値に関わる自分の現状を認識し、道徳的価値についての考えを深めることです。こうした学習を通して、児童は、道徳的価値に関わる自らの感じ方、考え方を自覚し、自己理解をも深めることになります。そして、このことが、児童自身の今後の課題や目標を培うことにつながるのです。

3 物事を多面的・多角的に考える

児童が今後出会うであろうさまざまな問題は、決して答えが一つであるとは限りません。

困っている人に手を差し伸べることは大切なことですが、場合によっては、手を差し伸べるのがかえって不親切になることもあります。

例えば、幼い子どもが転んで泣いているのを見て抱き起そうとしたとき、母親が手を差し伸べないでほしいと言います。子どもの自立のためには、差し伸べずに見守ることも大切ということです。親切は、相手の立場や気持ちを考えて手を差し伸べることもあり、見守ることもあります。親切にすることは大事なことでありますが、状況によっては親切にすることが難しい場合もあります。親切にしようとしてもできないことがあるといった理解も必要です。つまり、親切をさまざまな側面から考察し、親切についての理解を深められるように多面的に考えることが求められるのです。

また、親切に関わる行為は、親切という単一の道徳的価値だけで考えられるものではありません。例えば、電車に乗ってようやく座ることができたところに、荷物を抱えた高齢者が乗車してきて自分の前に立ったとします。その際には、席を譲ろうかどうか思い悩むことでしょう。この状況では、高齢者を思いやって席を譲ろうとする親切が中心となりますが、それだけで片付けられることでもありません。『どうぞ』と言って席を譲って、断られたらどうしよう」と、なかなか言いだせない場合もあります。親切な行為には勇気も必要になるものです。また、これまでさまざまな高齢者との関わりがあり、自分たちの生活の基盤をつくった高齢者には感謝の気持ちをもつことも必要です。このように一定の道徳的価値について考えていく中では、多様な道徳的価値との関わりがあります。

一定の道徳的価値から、関連する他の道徳的価値に広がりやつながりをもたせて考えるようにする多角的な理解も大切です。

道徳科においては、児童が道徳的価値の理解を基に、道徳的価値に関わる物事を、多面的・多角的に考えることができるような授業を構想することが大切になるのです。

4 自己の生き方についての考えを深める

道徳科の授業の特質として何をおいても押さえるべきことは、児童が道徳的価値に関わる諸事象を自分との関わりで考えることです。

児童が道徳的価値の理解を自分との関わりで図り、自己を見つめるなどの道徳的価値の自覚を深めることができているとすれば、その過程で同時に自己の生き方についての考えを深めていることにつながります。

道徳科の授業を構想する際には、道徳的価値の理解を自分との関わりで深めたり、自分自身の体験やそれに伴う感じ方や考え方などを確かに想起したりすることができるようになるなど、自己の生き方についての考えを深めることを強く意識した指導が重要になります。

道徳科の授業構想に際しては、児童が道徳的価値の自覚を深めることを通して形成された道徳的価値観を基に、自己の生き方についての考えを深めていくことができるような学習展開を工夫したいところです。そのためには、児童がねらいとする道徳的価値に関わる事象を自分自身の問題として受け止められるようにしたり、多様な感じ方や考え方に出会うことで他者理解を深めながら、自分自身を的確に見つめたりできるようにする必要があります。

③ 道徳科における主体的・対話的で深い学び

教育課程全体を通して 育成を目指す資質・能力

今次の学習指導要領では、「生きる力」をより具体化して、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く『知識・技能』の習得）」、「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成）」、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養）」の三つの柱に整理しました。児童が、これらの資質・能力を身につけ、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにすることが大切です。

そのためには、これまでの学校教育でのさまざまな創意工夫の蓄積を生かし、学習の質をいっそう高める「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進することが求められています。

道徳科における「主体的な学び」とは

道徳科の授業では、児童が学習対象としての道徳的価値を自分との関わりで理解し、道徳的価値を視点に自己を見つめ、自己の生き方についての考えを深めることで、道徳性を養うことが求められます。道徳科における主体的な学びとは、児童が自分自身と向き合い、道徳的価値やそれに関わる諸事象を自分事として考えることができるということです。

例えば、相手の立場や気持ちを考えて親切にすることのよさを理解す

るためには、児童自身が親切という道徳的価値についての価値観、つまり親切についてどのような感じ方、考え方をしているのかを認識することが求められます。親切の意義やよさの受け止め方は、児童のこれまでの経験によって多様です。

ある児童は、自分が親切にされたときの温かさ、うれしさから親切のよさを認識していることが考えられます。また、ある児童は、自分が行った親切に対して謝意を受けた喜びから親切のよさを認識していることも考えられます。

親切のよさや意義を理解するためには、親切という道徳的価値が自分と関わりがあるという認識をもつことが重要になります。このことが、自分の意志で親切について考えようとする主体的な学びの基盤になります。

「主体的な学び」が実現できているかという視点

児童が人間としての在り方、生き方に興味・関心をもち、
自己を見つめ、自己の生き方についての考えを深め、
今後の思いや課題を培おうとしている。

道徳科における「対話的な学び」とは

自分自身の道徳的価値に対する感じ方、考え方を吟味して、道徳的価値のよさや意義についての考え、また自分自身の思いや課題を広げたり深めたりすることで、自己の生き方を深めるようにすることが求められます。

道徳的価値に対する感じ方、考え方を吟味する際には、道徳的価値やそれを含んだ事象を一面的に捉えるのではなく、多面的・多角的に考えることが大切です。つまり、自分の感じ方、考え方の他にも、多様な感じ方、考え方があることを知り、それらと自分の感じ方、考え方を比較したり、検討したりすることによって、道徳的価値についての自分の感じ方、考え方のよさや課題を把握することができます。そして、このことが人間としての生き方についての考えを深めることにつながることも、よりよく生きようとする意欲や態度を形成することになります。

このような深い学びに必要なことは、多様な感じ方、考え方に会えることであり、そのための対話的な学びが必要になるのです。

「対話的な学び」が実現できているかという視点

児童が自らの道徳的価値観を自覚し、
対話を通して多様な感じ方、考え方と出会い、交流し、
自分の価値観を広げたり、深めたりしようとしている。

道徳科における「深い学び」とは

児童が自らの意志でねらいとする道徳的価値を視点に自分自身と向き合い、自分の感じ方、考え方を明らかにし、そのうえで、教師や友達などとの対話や協働を通して感じ方、考え方の多様性に気づく。道徳的価値やそれに関わる諸事象を多面的・多角的に考えることで自分自身の感じ方、考え方を深めることが、道徳的価値に関わる思いや課題を培うことにつながるのです。児童自身が「自分はこうありたい、そのためにはこのような思いを大切にしたい、このような課題を解決したい」などの願いをもてるようにする学びが、深い学びです。

主体的、対話的な学びを深い学びにつなげるためには、道徳科の目標に示されているとおり、自己を見つめ、自己の生き方についての考えを深める学習を行うことが大切です。児童は道徳的価値の理解を実感をもつて行うことで、自己を見つめたり、自己の生き方を考えたりする学習を行っているといえます。このような学習をより確かなものにするためには、道徳的価値を視点に自分自身の具体的な経験やそれに伴う感じ方、考え方を想起し、道徳的価値に関わるよさや課題を把握することができるような学習を設定することが求められます。このことで、一連の学習が深い学びにつながるのです。

「深い学び」が実現できているかという視点

児童が道徳的価値を自分自身を視点として捉え（見方）、
自分事として多面的・多角的に考える（考え方）ことを通して、
自らの道徳的価値観を広げたり、深めたりして、
課題や思いを培っている。

よりよい授業を構想するために

道徳科の授業は、児童の将来に生きて働く内面的な資質である道徳性を養うために行います。そのために、道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を行うのです。

学習指導案を構想した際には、学習指導過程の中にこうした学習が位置づいているか否かを確認したいところです。また、児童自身が感じ方、考え方を明確にし、今後の生き方につなげることができる学習になっているか否かを、常に確かめながら授業改善を図ることが大切です。

4 道徳科における個別最適な学び

「令和の日本型学校教育」の構築を目ざして

平成三十一年、文部科学大臣は、中央教育審議会に義務教育の在り方などについて諮問し、同審議会は、令和三年一月、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」を答申しました。

答申では、社会の変化が加速度を増し、予測困難となってきた中、児童の資質・能力を確実に育成する必要がある、そのためには、学習指導要領の着実な実施が重要であるとしています。そのうえで、我が国の学校教育がこれまで果たしてきた役割やその成果を振り返りつつ、新型コロナウイルス感染症の感染拡大をはじめとする社会の急激な変化の中で再認識された学校の役割や課題を踏まえ、二〇二〇年代を通じて実現を目ざす学校教育を「令和の日本型学校教育」として、その姿を「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学び」としています。これについて、ICTの活用と少人数によるきめ細かな指導体制の整備により、「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念である「個別最適な学び」と、これまでも「日本型学校教育」において重視されてきた「協働的な学び」とを、一体的に充実することを目指しています。

今次の学習指導要領が目ざすもの

学習指導要領が目ざすものは「生きる力の育成」です。そして、今次の改訂では③で示したとおり、生きる力を、生きて働く「知識・技能」、未知

個別最適な学びの実現のために

個別最適な学びを実現するためには、教師が配慮が必要な児童に、より重点的な指導を行って、効果的な指導を実現することや、児童一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材活用等の指導の工夫をするなどの「指導の個別化」が必要になります。

また、児童の視点からは、基礎的・基本的な知識・技能等や学習の基盤となる資質・能力等を土台として、これまでのさまざまな体験活動から得た児童の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、教師が児童一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組み機会を提供することで、児童自身の学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」も必要になります。

▼指導の個別化

教師が専門職としての知見を生かして、児童の実態に応じた学習内容の確実な定着を図る観点や、その理解を深め、広げる学習を充実させる観点から、カリキュラム・マネジメントの充実・強化を図ることが重要です。これまで以上に、児童一人一人の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導することや、児童が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことが求められます。

道徳科においては、児童一人一人の道徳的価値に関わる感じ方、考え方（一人一人の道徳的価値観）、道徳的判断力や道徳的心情など道徳性の諸様相の実態などを勘案しながら、児童がねらいとする道徳的価値を自分事として、主体的に考えるための指導の工夫が求められます。



『きみがいちばんひかるとき』には、**発達の段階を考慮して、一人一人がじっくり考える学習を位置づけています。**

の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の三つの資質・能力に整理しました。

これらの資質・能力を、一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながらさまざまな社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにするために育成することが求められています。

学習指導要領の総則の中でも、指導方法や指導体制の工夫改善など個に応じた指導の充実について、「児童が、基礎的・基本的な知識及び技能の習得も含め、学習内容を確実に身に付けることができるよう、児童や学校の実態に応じ、個別学習やグループ別学習、繰り返し学習、学習内容の習熟の程度に応じた学習、児童の興味・関心等に応じた課題学習、補充的な学習や発展的な学習などの学習活動を取り入れることや、教師間の協力による指導体制を確保することなど、指導方法や指導体制の工夫改善により、個に応じた指導の充実を図ること。」が記されています。

さらに、『学習指導要領解説総則編』には、児童はそれぞれ能力・適性、興味・関心、性格、知識、思考、価値、心情、技能、行動等が異なっていることから、教師は、児童が学習内容を自分のものとして働かせることができるように、個々の児童の特性等を十分理解し、それに応じた指導方法の工夫・改善を図ることが求められるとしています。

こうした考え方は、児童が道徳的価値を自分事として捉え、自己の生き方についての考えを深める道徳科の学習においても配慮すべきことです。

全ての児童が道徳的価値や自己の生き方についての考えを深めることができるようにするために、教師は、配慮すべき児童に声かけなどの重点的な指導を行って児童の思考を促すことや、児童一人一人の価値観や興味・関心などに応じた指導方法や教材活用等の工夫をするなどの「指導の個別化」を図ることが大切です。

▼学習の個性化

児童が、これまでのさまざまな体験活動から形成されてきた道徳的価値観、道徳的価値に関わる関心事項等と、学校のエデュケーション全体を通じて行われた道徳教育の成果や課題を勘案して、道徳的価値の理解を基に自己を見つめ、道徳的価値に関わる事象を多面的・多角的に考えるなど、教師が児童一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組み機会を提供することで、児童自身の学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」も必要になります。

	5年生の目標	

編集委員会

考えよう・話し合おう

夢や目標を実現するために大切なのは、**どんなこと**だろう。

大谷選手は、どんな思いで、「目標達成シート」に当時の夢を書きこんだのでしょうか。

大谷選手は、**どうして夢を実現することができた**のでしょうか。

あなたも、上の九ますの「目標達成シート」に、**ちようせん**しよう。

五年生の目標を中央に書き、その周りに八ますを、**目標を達成するために必要な行動**でうめましょう。

⑤ 道徳科における協働的な学び

『令和の日本型学校教育』の構築を目指して、全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現（答申）」では、「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないように、児童どうしで、あるいは多様な他者と協働しながら、他者を価値のある存在として尊重し、持続可能な社会の創り手となるために必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重視されています。

学習指導要領に見られる協働

学習指導要領においては、「協働的な学び」といった表記はありませんが、総則の「小学校教育の基本と教育課程の役割」の中に、個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めることが示されています。また、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」の項に、多様な他者と協働することの重要性などを実感しながら理解することができるよう、各教科等の特質に応じた体験活動を重視する旨が示されています。

各教科等においては、算数科の問題を見だし、問題を自立的、協働的に解決すること、音楽科の協働して音楽活動をする楽しさを感じること、総合的な学習の時間の探究的な学習に主体的・協働的に取り組むこと、特別活動の自己の役割を自覚して協働することなどの表記があります。

協働的な学びとは

協働的な学びについては、令和三年一月の中央教育審議会の「教育課程部会における審議のまとめ」で次のように説明しています。

▼道徳科における対話的な学びの実際

道徳の特別の教科化に当たって「考え、議論する道徳」の充実に掲げられました。道徳科の学習では、正に「議論」することが大切です。「議論」は互いの意見を戦わせるとする捉え方もありますが、これは討論であり、議論の一つの形態に過ぎません。「議論」とは、ある問題について互いの考えを述べ合うことであり、多様な感じ方や考え方に会って、自分の感じ方、考え方を深めることなのです。

▼ 対話の対象

道徳科における児童の対話は、児童どうし、あるいは児童と教師で行うことが基本ですが、指導の意図に応じて、授業に保護者や地域の人々、各分野の専門家などがゲストティーチャーとして参加する授業も散見されます。この場合は、児童とゲストティーチャーとの対話も考えられます。

さらに、教材に登場する偉人や先人などの人物との対話も考えられます。児童がそれらの人物と向き合い、自分の思いを問ひかけます。当然ながらそれらの人物からの答えはありません。しかし、児童は自分の問ひかけに対して、偉人や先人はどのように答えるだろうかと想像するのです。形のうえでは児童の自問自答ですが、それらの人物に真剣に向き合い、道徳的価値を追究しようとすることから、こうした学びも対話的な学びと捉えることができるでしょう。

▼多様な話し合いの工夫

議論にはさまざまな形態があります。意見を戦わせ可否得失を論じ合

「協働的な学び」においては、集団の中で個が埋没してしまうことがないように、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげ、子供一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせり、よりよい学びを生み出していくようにすることが大切である。例えば、優れた一斉授業は集団の中での個人に着目した指導や、子供同士の学び合い、多様な他者とともに問題の発見や解決に挑む授業展開などを内包するものであり、このような視点から授業改善を図っていくことが期待される。個々の子供の特性等も踏まえた上で、「協働的な学び」が充実するようきめ細かな工夫を行うことが重要である。

協働的な学びを展開するためには、一人一人の児童が自分の考えをしっかりともって、他者の考えと交流し、比較、検討を重ねることで、よりよい学びを生み出していくことができるようにすることが大切です。教科の特質にもよりますが、小学校における協働的な学びの多くは、**3**で述べた「対話的な学び」と捉えることができるでしょう。

道徳科における協働的な学び、
対話的な学び

道徳科が目ざすことは、一人一人の児童が道徳的価値の理解を基に自己を見つめるなどの学習を通して、自己の生き方についての考えを深め、内面的資質としての道徳性を養うことです。

児童が、道徳的価値についての自分自身の思いや課題を培うことがで



6年「『考える』準備たいそう」

 『きみが いちばん ひかるとき』の全ての学年に、
対話的な学びのヒントを位置づけています。

⑥教師の明確な指導観に基づく道徳科の授業構想

指導観を明確にした授業構想

「考え、議論する道徳」を具現化するためには、教師が内容項目についての理解を深め、児童に養うべき道徳性を明らかにして、教育活動全体で行う道徳教育を推進することが前提になります。

そして、その結果としての児童のよさや課題を基にして、日頃の道徳教育を補うこと（補充）や、指導をよりいっそう深めること（深化）、内容項目の相互の関連を捉え直したり発展させたりすること（統合）に留意し、授業で何を考えさせたいのか、教材をどのように活用するのかといった授業の方針を焦点化するなど、「明確な指導観」を確立することが重要です。

指導観は、『道徳科解説』に「主題設定の理由」として三つの視点で示されているものです。

- ① ねらいや指導内容についての教師の捉え方
- ② それに関連する児童のこれまでの学習状況や実態と教師の願い
- ③ 使用する教材の特質やそれを生かす具体的な活用方法

▼教師の価値観（ねらいとする道徳的価値について）

一時間の授業で教材を行うためには、教師が、一時間で指導する内容項目に含まれる道徳的価値を明確に理解し、何を大切にして指導するのか、自分なりの考え方をもちつことが不可欠です。

年度当初に、担任する学年段階の内容項目を精査して、道徳的価値を児童にどのように考えさせ、学ばせるかを明らかにしておくことが求め

▼教材観（教材について）

一時間の授業で教材をどのように活用するのかは、年間指導計画における展開の要素などに示されています。

しかし、実際に授業を行う際には、教師のねらいとする道徳的価値に関わる考え方（価値観）や、児童のねらいとする道徳的価値に関わるこれまでの学び、そこで養われた道徳性のよさや課題に基づいて、一単位時間の授業で児童に考えさせたいこと・学ばせたいこと（児童観）を基に、教材活用の方角性を再確認することは大切なことです。

▼授業構想のための教材分析

教材分析の目的は、教師がねらいとする道徳的価値について、児童に考えさせたいことに向けた学習を効果的に展開するための教材活用を可能にすることです。教材活用は、単に教材をどう扱うかを検討するのではなく、ともすると、教材中心の授業構想になりがちですが、教材分析の根幹をなすものは教師の指導観であり、授業構想は、教師の価値観、児童観に基づいて行われることが重要なのです。



『きみがいちばんひかるとき』に掲載されている全
ての教材には、冒頭に「考える視点」、末尾に「考えよ
う・話し合おう」、「つなげよう」が例示されています。
そして、学習指導書には、その背景となる指導観が
明示されています。

られます。

この教師の価値観は、学習指導案に「ねらいとする道徳的価値について」という表題で示されることが一般的です。教師が児童に考えさせたいことは、当然、一時間の授業についての考え方もありますが、同時に、教師の教育活動全体で行う道徳教育の考え方を示すものでもあります。

具体的には、礼儀に関わる授業の学習指導案の「ねらいとする道徳的価値について」の箇所に、「……よい人間関係を築くには、まず、気持ちのよい応対ができなければならない。それは、さらに真心をもった態度と時と場をわきまえた態度へと深めていく必要がある。」などの記述があるとすれば、これは本時の指導に対する教師の基本的な考え方であると同時に、道徳科の授業以外で、つまり学校の教育活動全体における礼儀に関わる指導を行う際の考え方でもあるということです。

▼児童観（児童の実態について）

教師が、これまでねらいとする道徳的価値に関わって、教育活動全体で行う道徳教育としてどのような指導を行ってきたのか、その結果として児童にどのようなよさや課題が見られるのかを明らかにします。

そのうえで、授業で児童にねらいとする道徳的価値に関してどのようなことを考えさせたいのか、どのような学びをさせたいのかを明らかにします。この考えさせたいことが、児童観であり、授業の中心的な学習につながります。

教科書 P.34-43 指導時期 6月第1週

7 友だち屋

【内容項目】B（9）友情、信頼 【主題名】友だちとは

ねらい

キツネに自我関与して友達との関わりを考えたり、自分自身の友達との関わりを考えたりすることを通して、友達と互いに理解し、信頼し、助け合おうとする態度を育てる。

ねらいとする道徳的価値について

友情とは、友達の間で、相手の立場を尊重して思いやる心である。それは、友達どうしが慰め合ったり、かばい合ったりするものではなく、ときには叱咤激励し合いながら互いに人間性を高めていくとする心情である。
友達の存在は、人格の形成においても大きな役割を果たす。具体的には、同年代の友達どうしで共にさまざまな活動することで、対人関係における喜びや悲しみを味わったり、友達のよさを学んだりしながら社会性や道徳性が養われていくことが期待される。また、同じ目的や目標に向かって学び合うことで、自らの資質や能力を高めていくことも人格の形成につながる。
友情の本質は切実な縁であるといわれている。切実な縁は、本来は、骨、角、石、玉など切って割くことであり、学問や技芸を磨き高めること、さらに、友達どうし、互いに励まし合い、競い合って高め合うことという意味がある。友達の解釈は多様であるが、学校や職場などで同じ目的や目標がある同等の相手として交流している人と考えることが一般的である。学校では、同じ学年で同じ学習目標に向かって学び合う同年代の人、つまり同級生は友達といえる。
友達と互いに理解し、信頼し、助け合おうとする態度を育てるために、学校生活のさまざまな場面で、友達どうし、理解し合うことのよさを考えさせるようにしたい。

児童の実態について

この時期の児童の友達関係は、低学年における同じ幼稚園、保育所の出身、家が近所、保護者どうしが親密などの理由で形成されていた友達関係から、同じ志向の者どうしが仲間集団をつくり、他の集団から一線を画して独自の行動をしようとする傾向が見られることが多くある。
教育活動全体を通じて行う道徳教育においては、友達どうしで理解し合うことのよさは、3年生からスタートした社会科や理科などでの、グループ学習において、協働して問題解決をする中で実感できるようにした。また、学級活動の中で、友達のよいところを発見し合う活動を行った。
その結果、友達のよさを積極的に見つけようとする姿が見られるようになった。いっぽうで、自分と異なるグループの児童については、無関心な態度を取ることも散見された。
こうした実態から、個々の児童が自分自身の友達に対する考え方を振り返り、友達と理解し合うことのよさを感じたときの思いを考えられるようにしたい。

教材活用について

▶▶▶ 教材の概要
本教材は、キツネが友達を求めている人に、友達として相手をする「友だち屋」を始める。クマとは食事を共にして、苦手なイチゴを食べる。クマは上機嫌で、友達だからクマと呼べという。次にオオカミに呼び止められ、トラップの相手をする。代金を請求すると、本当の友達から金を取るのかと言われ、キツネはオオカミからの友情を感じる。キツネは、オオカミからの友情の心地よさを感じながら家路につく。
▶▶▶ 教材の特質
内容項目B「友情、信頼」を中心に、ねらいとする道徳的価値を「友情」として活用する。主人公のキツネとクマとのやり取りからは、クマの「友だちと食べるイチゴはいちだんとうまい」、「…友だちじゃないか。クマでいい。」といった話からは、友達と共に過ごす喜び、友達との関わりからの喜びが感じられる。
また、オオカミとのやり取りからは、「おいキツネ」、「なんだい、友だち」、「…友だちから金を取るのか。…」、「そうだ、本当の友だちだ。」

教材分析

もっとも考えさせたいこと

自分自身の友達に対する考え方を振り返り、友達と理解し合うことのよさを感じたときの思いを考えさせる。

中心的な発問

「友だち一時間百円。」と言っていたキツネが、帰るときには「何時間でもただ。」と言ったのはどんな考えからか。

表層的な友達関係を考えがちな思いを考えさせる。
キツネは、どうして「友だち屋」をしようと考えたのか。

友達関係のよさ、温かさを求めようとするときの気持ちを考えさせる。
オオカミは、どんな気持ちで「本当の友だちだ」と言ったのか。

学習指導書 研究編3年「⑦ 友だち屋」

13

12

7 多様な方法を取り入れた指導

(問題解決的な学習・道徳的行為に関する体験的な学習)

道徳科における多様な方法を取り入れた指導の例として、問題解決的な学習や道徳的行為に関する体験的な学習が例示されています。道徳科の特質を生かした授業をするうえで有効な場合には、問題解決的な学習や体験的な学習などを積極的に活用することが求められます。

問題解決的な学習の基本的な考え方

道徳科における問題は、単なる日常生活の諸事象ではありません。道徳的価値に根差した問題です。問題解決的な学習は、児童が問題意識をもって学習に臨み、ねらいとする道徳的価値を追究し、多様な感じ方、考え方を基に学べるようにするために行うものです。

問題解決的な学習を展開するうえで、最も大切なことは、何を問題にするかということです。問題解決的な学習の「問題」は、一時間の授業で児童が最も考えるべきことです。それは授業者としての教師が設定します。教師は、指導内容や児童の既習事項、よさや課題などを勘案して、ねらいとする道徳的価値について何を考えさせるのかを明確にすることが重要です。児童の主体的な学習として、教材文を提示した後に、考えたことを児童に問うような授業を見ることがあります。道徳科で児童が主体的に学ぶというのは、道徳的価値やそれに関わる事象を自分事として考えるということです。

道徳科の授業では、児童に考えさせることをしっかりと教師が設定することが重要です。そして、児童が自分の体験やそれに伴う感じ方や考え方を基に自分なりの考えをもち、友達との話し合いを通して道徳的価値を深めたり、確かめたりすることが大切になります。このような手続きが深い学びとなるのです。

体験的な活動の基本的な考え方

道徳的行為に関する体験的な学習は、例えば、実際に挨拶や丁寧な言葉遣いなど具体的な道徳的行為をしたうえで礼儀のよさや作法の難しさなどを考えたり、相手に思いやりのある言葉をかけたり、手助けをして親切についての考えを深めたりするなどの活動です。

また、読み物教材の登場人物等の役割を即興的に演じて考える役割演技などを取り入れた学習などもこれにあたります。これらの学習は、単に体験や活動そのものを目的とするものではありません。体験や活動を通じて、道徳的価値を実現することのよさや難しさを考えられるようにすることが重要です。

▼ 劇化

道徳科で行う劇化は教材の内容を劇の形に変えるもので、児童が道徳的価値を自分事として考えられるように、また、教材の内容や考えさせたい場面や状況を把握できるようにするために、教材中の考えさせたい場面や状況を再現させることを意図して行います。

▼ 動作化

動作化は、教材中の登場人物の動作を模擬、模倣したり、それを反復したりすることです。動作化を行うことで、児童が登場人物になり切って、その感じ方、考え方を自分事として考えることをねらっています。



『きみがいちばんひかるとき』の全ての学年に、演じて考える学習を位置づけています。

のよさや難しさを確かめ、自分なりの答えを導き出すようにする、これが道徳科における問題解決的な学習です。

▼ 問題解決的な学習の指導過程

先にも述べた通り、道徳科の授業を問題解決的な学習で展開する場合、最も重要になることは何を問題にするかということです。ねらいとする道徳的価値について、日頃の道徳教育の結果としての児童の実態を考慮して問題を設定します。問題の設定で大切なことは、児童がその問題を自分事として考えようとする構えをもたせることです。一人一人の児童が学習問題を「自分にとっての問題」と捉えられるような工夫が求められます。

① 問題の追究(どのように問題を追究、探究を図るか)

児童の「自分にとっての問題」を解決するために最も重要となる素材は、児童自身が積み上げてきたねらいとする道徳的価値に関わる体験や、それに伴う感じ方や考え方です。児童が自己を見つめることができるような学習展開が求められます。

また、問題に対する自分にとっての答えを導くために、自らの感じ方、考え方を深めるようにします。そのためには、教材を一つの手掛かりとして、ねらいとする道徳的価値に関わる多様な感じ方、考え方に会ったり、道徳的価値を多面的・多角的に考えたりする学習を行うようにします。このときに大切になるものが対話的な学びです。

② 問題の解決(どのように自分にとっての答えを導くか)

児童の「自分にとっての問題」についての自分なりの答えを出すためには、多様な感じ方、考え方に出会い、多面的・多角的に考えることを通

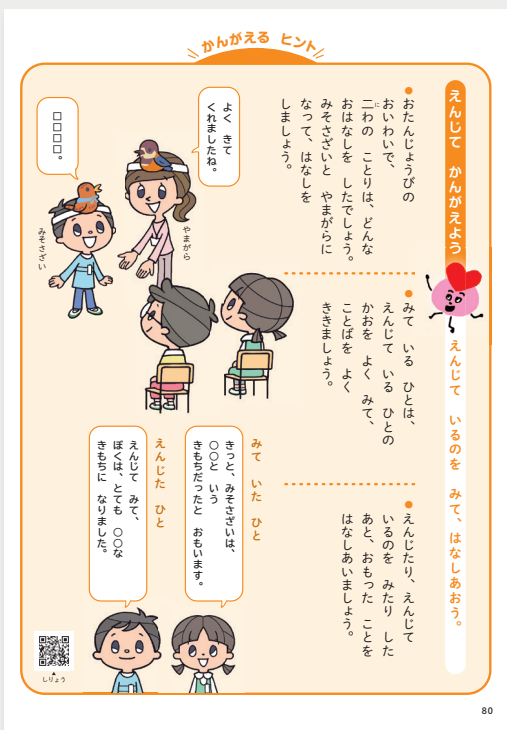
▼ 役割演技

① 役割演技の意義と特質

役割演技は、児童が道徳的価値の理解を基に自己を見つめるなど、道徳的価値の自覚を深めるために、教材中の登場人物などに自我関与して即興的に演じるものです。即興的演技は、教材の文脈通りに行うものではなく、児童の日常生活での自分自身の経験に裏付けられたものであったり、経験から割り出されたものであったりする場合が多くなります。

② 役割演技活用上の基本的事項

役割演技での応答は、自分の体験に伴う自分自身の感じ方、考え方に基づく即興的演技によるものです。また、一人の児童が役割交代で異なった立場で演ずることにより、自分と異なる感じ方、考え方を理解したり尊重したりするなど、多面的・多角的に道徳的価値を考えようとする態度が育成されます。必要に応じて、教師が演技を中断させて、演者の児童と観衆の児童の対話を促すことで、道徳的価値のよさや実現の困難さ、道徳的価値の多様さなど、道徳的価値の理解を深めることもできます。



1年「かんがえる ヒント えんじて かんがえよう」



光村図書

赤堀博行
(帝京大学 教授)



東京都公立小学校教諭、東京都教育庁指導部指導企画課統括指導主事、同主任指導主事、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官などを経て、現職。著書に『「特別の教科 道徳」で大切なこと』『道徳的価値の見方・考え方』（ともに東洋館出版）など。

内容解説資料

発行者 吉田直樹

発行所 光村図書出版株式会社

〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
TEL 03-3493-2111(代表)

光村図書ウェブサイト

光村図書 | Q



印刷 協和オフセット印刷株式会社

デザイン nimayuma